

青山教会会報

「わたしにしてくれたこと」

エゼキエル書三三章十〜十六節

マタイによる福音書

二五章三一〜四六節

牧師 増田将平

わかりやすい話ですが誰でも読んだ後に気持ちが悪くなるのではないのでしょうか。主イエスは私どもに何を伝えようとなさっているのでしょうか。「良い行いをすれば永遠の命、何もしなければ永遠の刑罰」という話なのでしょうか。それは因果応報であって、福音ではありません。私が困惑しながら説教準備で手に取った本があります。六〇年前に発行された新約聖書注解です。マタイによる福音書の執筆者は青山教会の牧師であった宮内彰牧師です。こう書かれています。

「この喩えの山は、人が意識しない行為

を神が意識されていることを知った時の驚きである」。なるほど、物語に登場する人々は最後の裁きを意識して行動したのではなく、必死になって助けたのではないのです。そうであれば、自分が救われるために他者を利用することであってその行いを「愛」と呼ぶことはできません。そして彼らは自分のしたこと、これを忘れていきます。自分があれをした、これをした、という思いからは完全に自由です。

後に主イエスに褒められている行いは特別に立派な行為ではありません。コップ一杯の水を飲ませる、食事を食べさせる、どれも小さな業です。巨大な愛の行為ではなく、誰もができることです。それら全てを主イエスが知っておられるといえます。

私どもは自分の目で、自分の行いを評価しています。自分の行いを知っていると思っています。自分はどれだけ大きなことができたのだろうかとかよくよ考え、何も大きなことはできないことに落胆します。または自分がしてきたことはどれほどの意味があったのかと虚しさに襲われ、全ては無駄であったのではないかと

思えてくる時もあります。逆に、少しでも特別なことができたように思うと傲慢になります。

こんな時に忘れていたことがあります。「主が、知っておられる」ということです。主は、私どもの全ての愛の業を知っておられる。どんなに人目につかないような小さなことであっても、主がそれらを大きなこととして受けとってください。それも、ご自分に対してしたこととして。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」。主イエスはいと小さき者と共におられ、一つになっておられます。「いと小さき者」とは、弱い者、惨めな者、貧しい者、助けを必要としている者たちです。同時に「いと小さき者」とは主の弟子として歩んでいる信仰の兄弟姉妹、その中で欠乏している人々をも指しています。

宮内先生は言います。「この教えは、信仰によつて義とされるといふ福音と矛盾するかのように見える。こういう話を聞くと違和感を覚えるというのです。なぜならまるで良い行いをすれば救われる、と言われているように思えるからです。そして先生は「隣人への愛とキリストの

愛を一つに考えるとき、このような愛は信仰と一つであると考えることができると言います。隣人に愛を行うことは、実はキリストに愛を行うことであり、二つは別々のことではなくて一つのことなのだということ。このような愛は信仰と一つであると考えることができるとは、どういうことでしょうか。いと小さき者への愛はどこから生まれるのかを考えてみると、裁きを受けたくない、という恐れからではありません。愛は恐れからではなく、信仰から生まれるのです。聖書では信仰と愛は一つです。信仰はあるが愛はない、ということはありません。のです。そして、信仰とはこのみ言葉を語ったお方が、私どものために十字架についてくださり、すでに私どもを救ってくださいている、ということ。す。

実はこの話は十字架直前の最後の説教なのです。この話は十字架と切り離して正しく理解することはできないのです。やがていつの日か全ての人々を裁くために来られる方は、私どもが知らない人ではありません。十字架についた方です。ハイデルベルク信仰問答は「キリストが再び来られる、ということに慰めである。それ以外のものではないのだ」といいます。

す。どうしてキリストの再臨が慰めなのでしょう。キリストが私のために、すでに裁かれているからだ。それが十字架です。主イエスを裁判にかけたのは総督ポンテオ・ピラトです。しかしあの裁きは神の裁きでもありません。キリストは十字架で、神の裁きを受けられたのです。私どもはキリストが全く罪のない方、神の裁きを受ける必要がない方であることを知っています。では何のために神から裁かれ、十字架につけられたのか。私どものためです。神の裁きを受けるべきであった私どものために、私どもに代わり、裁きを受けてくださった。神の裁きである呪いを、私どもの代わりに受けてくださり取り除いてくださった。これはすでに起きたことです。終わりの裁きの日に全てがひっくり返るといふことはありません。神の真実にかけてないのです。

だから改革者カルバンは言います。「私どもを裁くキリストは、私どもの保護者以外の何者でもないからです。この裁きが私どもを恐怖に突き落とすもののように恐れるのは相応しくありません。キリストが再び裁くために来られるのは、私どもの救いのためです」と言います。この終わりの日に、キリストは主イエス・

キリストにおいて示された神の愛から私どもを引き離そうとするあらゆる力を滅ぼしてくださいませ。

したがってクリスマスとキリストの再臨はつながっています。やがて再び来られるお方は、かつてクリスマスの日にと小さき者の一人としてお生まれになった方です。この方がクリスマスに人となられたのは、私どものため、私どもに呪いではなく祝福を与えるためなのです。

私どもはクリスマスを喜びつつ、同時に主が再び来てくださる日を待ち望みます。聖餐のある合同礼拝でよく歌う讚美歌の歌詞に「マラナタ」という言葉があります。この讚美歌はとも明るいメロディーで、子どもたちは喜んで大きな声で歌います。教会は初めの頃から「マラナタ」と祈り続けてきました。その意味は「我らの主よ、来てください」です。

主は、私どもの小さな愛の業、隠れた奉仕の全てを知っていただくことができます。だから人目を気にすることなく、主が全てを知っておられることを知り、小さな愛の業に生きていけばいいのです。私どもの主は来てくださいます。「マラナタ！」

(十一月十三日礼拝説教要旨)